謹　賀　新　年

よかネット
YOKANET

No. 85　2007. 1
㈱よかネット

もくじ

NETWORK

特産品・郷土料理で雇用づくり２
～平戸・松浦地区観光人材育成プロジェクト報告～ …… 2

ＴＯＭネット中心市街地フォーラム2006
～コンパクトシティを目指して～ …… 4

中心市街地活性化シンポジウム2005
―交流人口を増やす― …… 5

見・聞・食

福祉機器展で感じたこと
“売れるモノ”とするためには？
～くねくね手すり「クネット」の取り組みで考えた～ …… 6

屋久島宮之浦岳登山で発見したこと …… 9

第１回飯山市シンポジウムに行ってきました
～観光地を磨くセンスアップの技術革新について～ …… 11

近　況

伊藤若冲と売茶翁 …… 12
宮崎の美味しい地鶏刺身 …… 12
インターネットの活用 …… 12
一日中　朝八時半から　大相撲 …… 13
“まち選び”住民誘致”の時代はやってくる？ …… 14
2007年からネット人間をめざします …… 14
地元ネタで元気と笑いをくれる劇団ギンギラ太陽ｓの講演を見ました …… 15
市民も観光客も楽しむ佐賀城下ひなまつり …… 15
もうすぐ子供が生まれます …… 16
宝が当たる神社へお参りに行きました …… 16

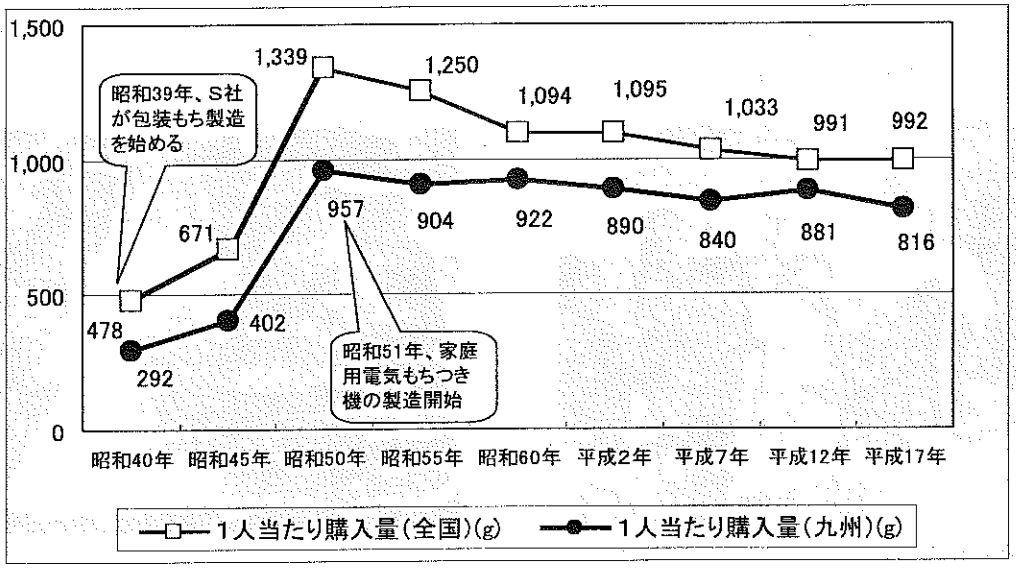
●餅は昭和40年代に、作るモノから買うモノに！

昭和30年代、餅は年末にご近所同士で集まって餅つきをしてお互い分けあったり、あるいは近所の菓子屋が正月だけ餅をつくり販売するなど、主に正月に食するのが楽しみでした。

昭和40年～45年ごろ、餅の購入量が少ないのは、まだ自前で生産している地域や町内会が多かったこと、日常的には食していなかったためと思われます。

しかし、昭和39年に包装餅の製品がでではじめ、工業生産型の餅がスーパーなどで販売されるようになり、昭和45年以後、購入量が急激に伸び、平成２年以降に一人当たり購入量は約１kg前後（１個50ｇとして20個／年間）となっています。

しかし、九州での餅購入量は全国と比べて約７～８割と、もちを食べる量は少ない土地柄のようです。



特産品・郷土料理で雇用づくり２

～平戸･松浦地区観光人材育成プロジェクト報告～

雪丸　久徳

●新たなじげもん料理を開発しよう（実践編）

昨年の秋より長崎県の平戸・松浦地区で「観光人材育成プロジェクト（特産品・食の開発編）」という事業のお手伝いをしている。事業の詳細は84号に載せているので、参照ください。

今回は11月26、27日に行われた、新郷土料理開発・地産地消推進人材育成コース「新たなじげもん料理を開発しよう（実践編）」（講師：古川則雄氏）について報告したい。

この講座の趣旨は、地元で獲れる素材をつかって、新しい地元料理を開発して、そこから地域振興と地元の雇用拡大を図ろうというものだ。

参加者は、食堂やレストランを営んでいらっしゃる方、地元の直売所に弁当を卸しているグループ等様々で、初日の松浦会場が約10名、翌日の平戸会場が約15名と、料理するのには程よい数であった。

今回の実践編に先だって、10月15、16日に「新たなじげもん料理を開発しよう（実践編）」ということで、地元食材の再確認や料理のアイデアだしを行って頂いていた。今回はその時に考えた料理の実践ということで、実際に調理室で調理し、その後に皆で試食し、商品化に向けて意見交換するといった流れで進めた。

講師には、佐賀市で居酒屋「ふるかわ」を営んでおられる古川則雄さんにお越し頂き、実演や、素材の風味の出し方の具体的なアドバイスなど、実践的な指導が行われた。

メニューは以下の通りである。松浦の場合は、車海老の養殖が盛んなのでそれを使って何か一品つくりたいというのと、そば粉と地元の食材をつかった料理ということで、テーマが車海老と蕎麦に設定されている。一方の平戸は、味は美味しいものの値段の割に身が小さいといったこともあり、あまり地元で使われないウチワ海老をつかった料理がテーマとなっている。

松浦の車海老をつかった料理
- きのこ入りそば粉クリームコロッケ
- そば粉と車海老のだんご汁
- 車海老姿オーブン焼き
- 車海老と鯵のポワレ
- バジルソースそばニョッキ添え
- 車海老と牡蛎の具たくさんオーブン焼き
- 鯛きり（古川さん実演）
- さらしな黄金衣揚げ（古川さん実演）

平戸のウチワ海老をつかった料理
- ウチワ海老クラムチャウダー
- ウチワ海老ピラフ
- カルパッチョ
- ウチワ海老天丼
- パスタ
- ウチワ海老れんこんはさみ揚げ
- ウチワ海老の鍋（古川さん実演）

調理は基本的にはグループ単位で行うことになっていて、プロの料理人とおばちゃんが協力してつくるグループもあった。さすがに、プロの技を

料理はプロの料理人とおばちゃんが協力してつくる

生きたウチワ海老を豪快にさばいた後

受講者の前で実際に料理を作ってみせる古川さん

料理指導に耳を傾ける参加者

目の前にする機会は少ないので、その技におばちゃんたちも釘付けになるシーンも見られたが、おばちゃんたちも劣らず手際よく、おまけに職人さんを盛り上げるトークがうまいので調理はとてもいい雰囲気で進んだ。

その後、料理が全て出揃ったところで試食タイムに入り、一品づつみんなで試食して意見交換を行った。さすがにそのときは、少し緊張した表情で、古川さんや他の人のコメントに耳を傾けていた。私も試食させて頂いたところ、素材が新鮮なので、どれも美味しく感じたが、なかには素材の風味があまり出ていないと思うものもあった。個人的には、松浦のそば粉と車海老のだんご汁と、海老天丼（ご飯は地元産赤米を使用）あたりが多少高いお金払ってでも食べたいと思えるほど美味かった。それから講師のウチワ海老鍋はいうまでもなく絶品で、カツオ昆布だしと醤油と赤酒でつくる、“魔法の出汁”の調合はすかさずメモさせて頂いた。

さて、料理後の試食では、まずはこれらの料理をどういった人をターゲットに、どこで売るか、その時の値段設定、課題、といったようなことが話し合われた。

車海老やウチワ海老は食材そのものが結構高いので、その仕入れと価格設定をどうクリアするかといった話や、他の料理との組み合わせで出すなど今回つくった料理の応用の話、もっと地元食材の風味を引きだすための料理の丸秘テクニック、あるいは、レトルト商品のようにパッケージして売り出すなど、いろんな話題があがった。

今回のように、料理人ばかりでなく、主婦や、加工グループなど、いろんな立場の方が一堂に会して、お互いの意見を聞く場は、めったに無いことだと思う。違う立場の方と意見交換することは、主婦の方はもちろん、プロにとってもいい刺激になったのではないかと思う。

この講座はこれで基礎編が終わり、今後は希望する方のみを対象とした個別指導に入っていくことになる。地域雇用の拡大を図ることが最終目標なので、ある意味ではここからが本番と言える。なるべく早く市場で通用するような‘じげもん料理’が出てくるように応援していきたい。

●良いパッケージ･デザインは働く楽しさにつながる

12月３，４日に行われた目玉商品・新みやげ品開発人材育成コースの講義では、アートディレクターの西田建一さん（アットマーツ主宰、カゴシマライフネット代表）による「人を惹きつけるパッケージ・デザインとは何か」と題した講義が行われた。西田さんは鹿児島を拠点に活動しており、特産品開発において、企画、パッケージデザイン、店舗設計と幅広くデザインに関わっておられる。当日は、平戸松浦両会場合わせて計40名近くの参加があった。

講義では、「デザイナーってどんな職業？」にはじまり、地域に住むデザイナーと組んで、商品づくりを進めるときのコミュニケーションの取り方や現在のデザインの潮流など、西田さんが係わった事例などを交えての話があった。

その中で、田舎の醤油屋さんのパッケージデザインについての話が印象的だったので、それについて紹介したい。内容を端折って説明する。

鹿児島のある田舎の町の醤油屋の話。都会に出て行ってた娘が家に帰ってきて醤油屋を手伝うことになった。しかし、娘：「お父さんが売っている醤油は美味しいけど、見た目がダサいから人に勧められない」そこで、父：「パッケージデザイ

オーブン焼きの焼け具合をチェックする

いよいよ試食タイム

ンにかけられるお金はあまりないんだが、せっかく娘が手伝いに帰ってくるのなら…」

ということで商品のパッケージデザインを一新することが決まる。それから試行錯誤の末、娘もそこで働くスタッフも自信を持って人に勧められるかっこいいパッケージデザインができあがる。スタッフ一同、これ、かっこいいねぇってことになって、次にやったことが、自社の製品の特徴がお客さんがわかりやすいように整理しなおしたパンフレット作成。さらには、娘さんが中心となって、会社のロゴ入りTシャツをつくったり、業務用車に会社のロゴをペイントしたりと、これまで働いていたスタッフと一緒にあれこれやり始めた。

最終的には、働いている人達自ら、かっこよくなった商品をもって、Tシャツ着て、車に乗って、と自慢してまわるということが起こった。結果、売り上げは1.6倍と前年より伸びたという話。

この話で印象的だったのは、「よいパッケージデザインをしたから売れるというのではなく、そこで働いている人が充実感もって働いたり、楽しく働くことにつながったことで売れた」というところだ。

デザインとコストが衝突したらコストが優先されることが多く、デザインに対する位置付けは低いと感じるが、今回の話の中にあった、消費者を惹きつけるだけでなく、現場の気持ちを惹きつける（一つにする）きっかけとしての「デザイン」という視点は、地域づくりにおいても重要だと感じた。　　（ゆきまる　ひさのり）

TOMネット中心市街地フォーラム2006 ～コンパクトシティを目指して～

山辺　眞一

毎年実施しているＴＯＭネットの活性化フォーラムの2006年度のテーマは「コンパクトシティをめざして」でした。

まちづくり三法のうち、中心市街地活性化法の改正が行われましたが、何が改正されたのか、そのためにどういう取り組みが求められるようになったのか、という点を、フォーラム前半で、九州地方整備局の渋谷さんに分かりやすく説明してもらいました。

●地域の主体性と公民協働のまちづくりを支援

今回の改正の狙いは、一つはまちなかから人が減ったのをどう回復するかということ、二つめは、まちなかの賑わいを回復するため、新たな集客機能などの立地を推進するという点です。その方法として、まちなか居住に対する支援制度や、郊外店の出店規制とまちなかの大型空店舗の再生への支援などが打ち出されています。それらまちなか再生の意義や、先進事例、さらに支援策等について、説明してもらいました。

今のままだと、市街地の人口は減少し、公共交通の維持もできず、いよいよ住みにくいまちとなってしまいます。どういうまちをめざし、作るかは、その地域の人々が選択すれば良いことです。

パワーポイントで熱心に講演する九州地方整備局渋谷総務部長

しかし、みんなが望んでいるのは、自家用車が無ければ暮らせないまちではなく、誰もが歩いて暮らせるまち、高齢になっても住み続けられるまちであり、それは集約型の都市構造と言われています。これから迎える超高齢社会を考えれば、そういうまちをどう作るかが、重要ではないかということです。今回の改正は、構造改革特区などと同様な流れにも沿ったものであり、上からの押しつけではなく、集約型のまちなか再生、そういうまちづくりを選択すれば集中的に支援をしましょうということです。さらに、都市計画などの法制度においても、原則は規制を行い、例外によって緩和をすると、地域が何をしたいかをまず考えて欲しい、という姿勢に転換したということです。

地域の主体性、合意を確認するためのもう一つの改正のポイントは、地元の関係者を拡大すること、つまり商工業関係者だけでなく、まちに居住している、まちを利用している地元住民、地域活動組織などとの連携組織を設置するという点です。公民の協働によるまちづくりがますます重要になっています。

●都市の構造改革

ＴＯＭネットの代表理事林氏からは、都市の構造改革の方向として、「歩きたくなるまち」「良好な街なみ」「住みたい、住みやすいまち」を目指している事例について、ハードにソフトをのせることの重要性、地域が何をしたいのかという主体性、そして身の丈にあった計画づくり、具体的には、人口10万人に満たない都市でも主体性を持って、みんなで考えていくことで、まちの再開発を実現している事例などの報告をして頂きました。

宮城県旧古川市（7万人）では、旧大型店の空き店舗と周辺地区を含めた約1.8ｈａの市街地再開発事業が完成し、市民のコミュニティの場として機能しています。中でも約1千席のシネコンは順調に稼働しているそうです。

また、秋田県旧横手市（4万人）では総合病院跡地活用を図書館や高齢施設など集客と公益機能の複合機能を核として進められています。その他にも人口僅か5千人の北海道旧風連町の計画など、ＴＯＭネットがお手伝いをしている事例について紹介がありました。

●生活者を起点にまちづくりを

後半のリレートークでは、佐賀市の池田さん、

リオーネ古川　平成18年3月に完成

佐賀のまちなかにオープンした「佐賀座」

北九州市の山口さんから、まちなか再生の取り組みについて実践例の報告をして頂きました。

佐賀の池田さんからは、まちなかの取り組みは、商店街のためだけではなく、市全体のためにまちなかが重要であるという意識が必要であることを前提として、公民協働で実現された子ども専門の本屋さん（よかネット2006.7で紹介）、来街者を呼び込むために再生された佐賀陶磁器の展示スペース「佐賀座」（よかネット2006.11紹介）などの事例紹介がありました。

山口さんからは、福岡県西方沖地震の経験を踏まえて、北九州の都心で、独りでも安心して住むためには、居住と就業が近接しているだけでなく、商店街が外の地域と連携することで災害時の安心度が高められる。そのために「震災疎開パッケージ」の取り組みを進めている事例紹介がありました。人がたくさん住んでいれば安心というわけではなく、外とつながっていることが必要で、そういう街には独りでも住むことができるのでは、という指摘がありました。

いずれの場合でも、まちに住んでいる人々のためにまちなかが持つべき機能、生活に必要な様々な機能だけでなく、もしもの時の安心感として内外とのコミュニティ、つながりを持っておくことが必要であり、そこに住む生活者の視点を持つことが重要です。そのためには、地域が主体性を持

って考えること、そういう場を持つことが大切と思います。公民の協働によるまちづくりには、協働の体験を通じた共感と、まちづくりを議論する場づくりが重要だということを再認識しました。

（やまべしんいち）

福祉機器展で感じたこと “売れるモノ”とするためには？ ～くねくね手すり「クネット」の取り組みで考えた～

山田　龍雄

昨年の11月９～11日に「西日本国際福祉機器展」が北九州市の西日本総合展示場で催されていたので、急きょ出かけて見学してきた。

●さらなる利便性、快適性を追求する福祉機器

会場には約100箇所のブースがあり、ＴＯＴＯ（高齢者用のトイレ、バス）、トヨタ自動車（障害者用のウェルネス自動車）などの大企業の製品出展のほか、介護機器、介護用品、大学の研究室の研究途上の機器など、バラエティに富んだ製品が出展されていた。私はできるだけ実際に試したみたり、製品の特徴を聞くなどしたため、見学するのに３時間ぐらいを要した。

福祉機器は、高齢化に伴い需要拡大が期待される分野であるため、各社凌ぎを削っている様相であり、特に福祉用のトイレなどはかなり使う人の便利さはもちろんのこと、臭いの除去など快適性に配慮したモノが多かったように感じだ。私がみたもので、少し面白かった製品を紹介したい。

（自動排除処理機：マインレット夢～製品①）

実際に寝たきりの介護の人で、少し経済的にも余裕のある人が身近にいないとなかなかお目にかかれない製品である。これは腰と臀部をカバーする“おむつカップ”を装着し、これが排便、排尿をセンサーで感知し、自動的に便と尿を吸引するするといったものである。これがあると確かに寝たきりの人の介護は楽になるだろうと感じたのであるが、自分自身が自力で排便、排尿がはできなくなり、このような機械に頼るようになることを想像すると、やはり「ピンピンコロリ」でいきたいものだと思った次第である。

自動的に排便･排尿をしてくれる装置

（臭いの少ない携帯トイレ：リソレット～製品②）

この製品は寝たきりまではいかないが、家の中にあるトイレまで介助して連れていくのが大変なので、ベットの横におく携帯用のトイレである。この商品の優れている点は、汚物を固形物と液体に分離した後、固形物は微生物で水と炭酸ガスに分解し、尿は活性チップと酵素（700ミリリットルの容器に入っている液体を便層に流し入れる）によって濾過し、浄化水として再使用できる。上下水道の設備が必要ないこと、臭いが少なく、ベットの横においてもあまり気にならないことなどである。ただし、繊維物質等で分解はできない物質は少しずつ溜まるので、２～３ヶ月に１度の処理が必要だ。これは環境に配慮した製品であり、なかなか優れモノと思った次第である。

しかし、製品①と製品②とも価格を聞いてみると300～400千円であり、経済的に余裕のある人しか購入しないのではないかと思った。

（おむつ処理パック：エコムシュ～製品③）

この商品は介護高齢者のオムツを機械の穴の中に「ポン」と入れて、スイッチを押すと３秒でパックとなり、臭いと菌などが気にならない優れモノである。これもニーズがあり、現在、老人福祉施設などに納品されているとのことであった。

今、家庭用のものも開発されており、これは昔

ニオイも少なく、ベッドの横に置ける簡易式トイレ

の洗濯機の手回し水切り器みたいな形となっており、手動でパックする。施設用の機械が約300千円程度ではなかったかと思う。これもなかなか高い製品である。

担当者曰く「なかなか大量生産ラインにのらないのでコストが落とせないのですよ」とのこと。

(電気利用で検知する緊急通報装置:～製品④)

高齢者住宅などに取り付けるもので、従来はトイレの前などにセンサーを設置し人の動きを検知する「センサータイプ」のもの、水道メーターの箇所に取り付けた機器で水の流れを検知する「水センサー」のものがあった。このシステムは「毎日使用する電気の利用の変化で異常を察知する」ものである。

例えば24時間以上電気製品のスイッチを入れていないような場合に、検知器が反応するという装置である。この製品のメリットは、「呼び出し非常用押しボタン」がコンセントに差し込んで利用できること、検知するセンサー機器も構造がシンプルで配線工事も不要になったことなどがあげられている。コストも基本セットプラン（カードＢＯＸ、在宅カード、非常用呼び出しボタン、利用検知機　元気ボタン）で工事・材料費が約150千円、月々の基本料金が約3,700円とそれほど高くない。

(手話通話等の遠隔情報保障システム～製品⑤)

このシステムは、筑波技術大学産業技術学部情報学科が取り組んでいるもので、聴覚障害者が健常者の人たちと同時に講義を受講しようとした場合には、先生の横に手話通訳者をおいて同時通訳しないといけない。

この製品は、別のスタジオ内に流された大学の講義映像を手話通訳者が見ながら、手話通訳の映像を大学の講義室へ流すものである。要するに手話通訳者はわざわざ大学まで行かなくて、一箇所でどこの大学の講義も手話通訳できるというものだ。これも、これからのユニバーサル化の流れの中では必要なシステムであると感じたのであるが、説明の人に「事業化の目途はあるのでしょうか？どこから収入を得るのですか？」と聞いたところ、「今のところ全く考えいません」との返事であった。やはりこれは大学の生徒拡大のためのサービスシステムと考えた方がよいのかも知れない。

オムツなどを上の穴にポンと入れると自動的にパックさ

●くねくね手すり～「クネット」とは？

福祉機器展をみた２週間後ぐらいに、ある人から「㈱クネット・ジャパン」という面白い会社あるので、是非紹介したいという電話があった。

最近「クネット」は、ずいぶん新聞や経済雑誌の取りあげられているので、既にご存じの方もいるかも知れないが、一応製品の概要を説明すると、「くねくねと波のように曲がった手すり」のことである。今までの直線の手すりに比べると何か柔らかな雰囲気を醸しだし、おしゃれな感じもする手すりである。

予定の日には常務取締役と営業主任の方がわざわざ当社に訪ねてきていただいた。「よかネット記事」にしようと考えていなかったのでメモもしないで聞いていたのであるが、この時に、一番感心したのは①このくねくね手すり一本のメーカー会社であること、②コスト削減のため中国の工場で生産していること、③この手すり一本にかけて、よく事業化に突入したことであった。

「クネット」は、なかなかお洒落で、良い製品なのであるが、これを販売するために相当の投資をしており、元を取れる公算はあったのかと思った。しかし、話を聞いていると、かなり販売戦略をたて、事業展開しているように感じた。後日、開発のいきさつや販売戦略について詳しく知りたいと思い、改めて福岡支社に連絡をとって伺った

会社に入ると、古賀副社長自ら対応していただいた。古賀副社長は、私に質問をする余裕さえ与えず、すぐに階段に取り付けている「クネット」を見せ、手に取りながら、この製品の良さを力説された。「直線式の手すりでは、高齢者が登るときにはどうしても身体を引き寄せるために引っ張る力が必要となり、降りるときには手首がおさえた形となって不自然となる。このクネットは、杖と同じように床をおさえた形となるので非常に楽なのですよ」。たしかに実際に試してみると、直

天神地下街に取り付けられている「クネット」

線式の手すりより楽であり、手首も不自然な形とならないのである。現在、天神地下街の旧岩田屋に上る階段や同地下街の南端階段に取り付けられている。

現地に行ってみると、リズミカルにポンポンと「クネット」に触りながら降りている高校生が何人かいた。若い人にとっては、「手すり」というより触ってみたいアクセサリー的なものかも知れないと感じた。

（香港の企業と提携し、コストダウン）

「クネット」を製造・販売しているのは佐世保市の企業「（株）クネット・ジャパン」である。もともと平成13年に港湾運輸会社の別事業として開発・販売していたものであるが、この港湾運輸会社の業績が悪化したため、このクネット事業を分離することになり、広告代理業として関わっていた古賀さんが「この製品は絶対売れる」という信念のもと、イベント会社を経営していた人と一緒に平成16年に会社を立ち上げたとのことである。

「クネット」の最大の問題はコストであった。通常、日本で生産すると通常の手すりの３～５倍がかかるそうだ。そこで香港のメーカーと提携し、現在、金属製と木製の「クネット」は中国で生産している。そして現場の長さに揃えたり、あるいは溶接などの２次加工を佐世保工場で行っている。中国で生産するようになって、コストも通常の直線手すりの1.2倍程度にダウンさせたことが販売拡大の大きな要因となった。

西日本展示場で感じた良い製品であってもコストダウンしないとなかなか普及しないのではないかと感じていただけに、「クネット」がコストダウンとあわせて販売攻勢を戦略的に実施されてきたことが、市場に受け入れられ、販売アップにつながったポイントであったと感じた。

古賀副社長は、もともと広告代理業が専門であり、製品は流通経路に乗せないと売れないことを知っておられ、手すりの流通経路を調べたところ、建築や土木の手すりは、建築金物問屋ルートとなっているのであり、まずこのルートに営業をかけ、この金物問屋に製品を知ってもらい、卸すようにしたこと。さらに、現在では、設計事務所への営業展開をされている。

また、古賀副社長は「外部空間で使用する手すりは既製品もあるが、だいたい流通構造ができていなく、鉄工所での特別発注が多い。もっと、この手すりの良さを知ってもらい、公園や歩道橋の手すりなどにもクネットを設置してもらいたい。」と言われていた。

（バリアフリーの製品からスタンダードな製品へ）

古賀副社長は「バリアフリー製品といわれるうちは、何か、それだけでバリアーを感じ、バリアーがあることなのである。バリアフリーといわれないことで、このクネットがどこにでも取り付けられ、普通の風景になることが大事なのだ」というようなことを言われた。

今後の課題は「ハートビル法」と「交通バリアフリー法」の合体する法律と基準の話が出ており、その新基準が今年度に公布される予定らしい。これまでの「手すりの基準」では踏み面から高さ「650㎝（子ども用）」と「850㎝（大人用）」の箇所に２箇所設置することが義務づけられていた。

「クネットの場合、２本ではなく１本だけでもあらゆる人の動作をカバーできる」ということを委員会の先生方へ説明に回っておられる。この基準に「但し書き」が記載されるかどうかが、販売に大きく影響するようである。

「クネット」は、昨年度の販売額は約１億７千万円であったが、本年度は５～６億円と引き上がる予定らしい。たぶん理にかなった上り降りしやすい製品であるので、今後、多くの公共空間で「クネット」にお目にかかることになるかも知れない。さらに将来、日本、世界の手すりは「直線手すり」ではなく、「くねくね手すり」が当たり前になるかも知れない。

今回の福祉機器展のいくつかの製品と「クネット」とを取材し、改めて製品づくりは製品自体の

性能の良さはもちろんのこと、市場に受け入れられるコストにしていくような生産体制、あるいはマーケットをにらんだ販売戦略の両面を追求していく必要あることを学ばせてもらった。

（やまだ　たつお）

屋久島宮之浦岳登山で発見したこと

糸乗　貞喜

●あごひげと頭髪の関係

「１グラムでも軽く」という命令がリーダーから出ていた。今回の屋久島の宮之浦岳登山は、松崎さんと新貝さんに“拉致”されたような状況で、私の本音は「とても歩けないのでは」という心配であった。というわけで、旅行用のヒゲ剃りは持って行かないことにし、そのために問題が発生した。

●行路と日程

10月13日
- 10:10　ＪＲ博多駅リレーツバメで出発
- 12:29　新幹線鹿児島中央駅着
- 13:10　フェリーで屋久島へ
- 15:00　宮之浦港着→バスで安房(あんぼう)へ。鶴屋泊

10月14日
- 04:00　起床
- 04:30　タクシーで淀川登山口へ
- 05:10　ヘッドライトをつけて登山開始
- 12:10　宮之浦岳山頂（途中30～1時間ごとに休憩をとる）、食事
- 16:00　一日中雲一つない快晴のもと新高塚小屋着、泊（シュラーフを持っていたが寒かった）、夜中に雷つきの大雨。

10月15日
- 09:00　小屋を立って３時間で縄文杉着
- 16:30　荒川登山口着、タクシーを呼んで安房へ。一応、筋肉痛は出ていなかったが、翌日に歩けるか大心配。

10月16日　屋久杉自然館などの見学と益救(やく)神社。

おそらく古い神社があるに違いないからといって、お宮さんを訪ねた。益救(やく)神社があった。大雨の降るところの神社だから、火事・防災に効き目があるかも知れんと思って、「お札をたくさんもらってきて配ろう」と聞いてみたが、今はないということだった。

まるまる四日ひげを剃らずに、17日の朝、鏡を見たら顎髭の白髪がえらく多い。頭髪と比べるとほとんど白髪だ。ちょいちょい〈頭が真っ白で顎髭は真っ黒〉とか、〈頭は黒いのに顎髭は真っ白〉といった人を見かけて、不思議に思っていた。今日この頃のことだから、染めているのかなとも考えたが、自分の髭で仮説の変更を迫られている。

今まで考えていた仮説は、古い順から、つまり生まれが早いところから白髪になるのかなと思っていたが、今後は「苦労したところから白髪になる」に変更しなければならない。私の事例では「食いしん坊が顎をよく使った」ので、顎髭から白髪になっているらしい。というわけで、しばらく顎髭を伸ばすつもりでいる。

●一日10時間、二日で17時間歩けた

この17時間は、ふつうの人の行程時間で、それで歩けるかどうか心配していた。それが難しい時は第一日12時間ぐらいも考慮に入れてくれていた。そのための早立ちだった。ところが、自分のもつべき責任分は自分で持って、とにかく歩けた。シュラーフもヤッケもセーターも水１リッターも、自分の食料やペットボトルのお茶も持って歩けた。筋肉痛も起こらず、二日目も歩けた。

これは意外だった。

有り体に言えば、50年余、高校２年の時の大山や北アルプス以来、登山のようなことはやっていない。20年ほど前に九州へ来てよかネットの代表になったとき、５～６人の所員と英彦山に登ったが、２～３日筋肉痛で階段の上り下りができなかった。一昨年、今夏のメンバーに誘われて久住山に登った。法華院温泉山荘一泊の二日行程だったが、初日の７時間余でへばった。５～６時間経った頃には「先に行ってください。後から自分のペースでついて行くから」といって、マイペースで歩いた。山歩きの場合、いや、日常の場合でも、他人のペースにあわせて行動するような無理をしないことにしている。無理にオーバーペースをやると、調子が狂って脱落し、結局チームに迷惑をかけることになると信じ込んでいる。

法華院温泉山荘はすばらしい温泉で、そのお湯の中で脚を丹念にもんだ。あまりひどい筋肉痛にならず、翌日は４～５時間歩けた。

しかし今回はガイドマップなどを見てもスケールが大きそうだ。

決意して、八月末に自転車を買ってきて、９月から15～18キロぐらいのコースを、早朝に走り始めた。皆さんは「歩けばいい」とアドバイスをし

新高塚小屋で食べ物をあさるシカ

ウイルソン株（巨大な古い杉の根っこ）と私

縄文杉の根っこの辺り、迫力はありました

雨量がすごいから、こんな巨岩が流れ出る

てくれるが、それほど楽しくもない車の通るような道を、私のような"意志薄弱"な人間が続けられるはずがない。自転車なら、コースも変えられるし、海岸線の潮風もあるし気分がよい。とにかく、１時間あまり脚に負荷を与え続けるというトレーニングをやった。

もう一つ、宝満山にも登った。この方はかえって、自信喪失になった。登り降り５時間ほど歩いてほぼ下に着いたが、ほとんど膝が笑ってしまっていた。ついでに、糸島富士といわれている可也山にも登った。これは登りが１時間くらいで問題はなかった。

有り難いことに雲一つない好天にも恵まれ、宮之浦岳を中心とする峰々を眺めながら歩いた。道のりはきつかったが、楽しい思い出になった。

●そして鹿鳴を聞いた

鹿の鳴き声を始めて聞いた。「フィューーーン」というような高い長い声だ。夜明けごろと朝方に多かった。

この原稿を書くために、鹿の鳴き声についてネットで調べていたら、（財）奈良の鹿愛護会が鹿の鳴き声を発表していた。その声を聞いてみた感じでは、縄張りを主張する鳴き声というのに似ていた。ただし、屋久島の鹿はかなり慣れているとはいえ、野生の動物だ。奈良も野生の鹿かも知れないが、屋久島の1500メートル辺りの、空気を切り裂くような屋久鹿の声が聞けてうれしかった。とりあえず、関心のある方は、上記愛護会を検索して、声を聞いてみていただきたい。おそらく、一層、屋久島に行きたくなると思う。

その鹿に会ったのは新高塚小屋である。夕方４時半頃について、ウイスキーと焼酎と目刺しとアルファ米の湯づけとカレーの夕食をいただき、７～８時頃寝た。12時頃変な音がして、同宿の別のチームの人に言われて出て見ると、鹿がゴミ袋を漁っていた。急いで掃除をしてゴミ袋は部屋の中に持ち込んだが、気がついてみるとリンゴを一個パクられていた。われわれを全く怖がらないし、フラッシュランプをつけて写真を撮っても逃げない。その後足も冷たいし、なかなか寝付かれなかった。

夜明け前の３時頃土砂降りになり、雷鳴や稲光もやってきた。

実は、前日のあまりの好天に、帰ってからの自

慢の言葉を考えながら歩いていた。「屋久島ってね、一年366日雨が降るっていわれているけどね、僕らが行った日は367日目でね、一日中快晴だったよ」という駄洒落だ。雷鳴を聞きながら、やっぱり屋久島には降参だなと思っていた。参考までに、屋久島の雨量観測地点のうち、欠測の無かった地点の2005年の年間雨量を上げておく。

5476．4365．5340．6580．5158．9181 ㎜

※日本の平均はおおよそ1600～1800㎜ぐらい

翌日にも、角の大きい雄鹿や子鹿にも、何度も会った。猿もいたがこの方は警戒心を持っていた。

もう一度行ってみたいと思う。黒味岳、栗生岳、宮之浦岳、小高塚山の間の風景と、宿で食べた“首折れ鯖”の刺身の味が忘れられない。

（いとのり　さだよし）

第1回飯山市シンポジウムに行ってきました

～観光地を磨くセンスアップの技術革新について～

原　啓介

12月９日に、長野県飯山市で開催された「第１回飯山市シンポジウム～観光地を磨くセンスアップの技術革新～」に参加した。

このシンポジウムは、「既存の資源を、新しい発想による視点からリユース・有効活用することで、観光地を再生する」というテーマで、文部科学省の補助金を得て設立された立教大学アミューズメントリサーチセンター(ＲＡＲＣ)の主催で行われた。シンポジウム参加者は研究者・事業者・コンサルタントなど32名、会場は長野県飯山市なべくら高原の「森の家」であった。

これまで、日本の計画は、住民参加型の町づくりや観光地の運営と言う様な観光事業のマネジメントに力を注いできたが、低迷する多くの観光地では、マネジメントよりも、資源の見直しやアトラクションの見直しが必要とされる事のが多いものである。シンポジウムのテーマである革新は、大金を投入して新たなハコモノをつくるのではなく、以前と変わらない建物や街の"使い方"や"見せ方"を変化させることにより、省資源・低コストで新たな魅力を創り出す仕組みを探るものであった。パネルディスカッション形式で全国の事例が紹介され、センスアップについての問題提起がなされた。その後、農村観光と都市観光の二つのワークショップが開催され、そこでも事例の紹介をと、参加者全員による発想の転換のポイントについて議論が行われた。

シンポジウムの様子。この後、農村観光･都市観光の2チームに分かれてワークショップが開催された。

事例として、古びた商店街への視点を変え、「昭和の町」というテーマ設定で成功した豊後高田や、住民が楽しみながら路地裏散策などの企画を展開している別府八湯温泉の取り組み、歴史ある蔵や商家のリノベーション行いながら、その情報を大人向けの地域情報誌に掲載し、雑誌編集と街並み再生のコラボレーションを図った長野市善光寺参道などが紹介された。

特にこの長野市の取り組みについて、地域情報誌編集社が建物や街並みの再生、特産品開発、観光地計画に携わりながら、各種メディアで情報発信を行うモデルは、行政・建物所有者・観光事業者にとっては、メディアの視点やトレンドの情報を活用しながら、再生した観光地や店舗をＰＲできるというメリットがある。また、メディアにとっては、再生後のお洒落な店舗などの情報を発信することで、地域の魅力的なコンテンツが新たに付加されるというメリットがあり、双方にとってうまみがある。

また、まちづくり・観光計画に限った話ではないが、街なかに普通に転がっているものに面白さや価値を見いだす視点、それらを一つの物語に編集し、商品をつくる力を養う必要があると改めて思った。当社でも“まちあそびの会”をこれまで２年間で６回開催したが、ここ半年ぐらいお休みをしてしまった。この活動を再開し、まち歩きの

メニューや楽しむノウハウを蓄積していくことが今年の課題の一つである。

博多から長野県飯山市までは飛行機・電車などを乗り継ぎ、７時間以上を要した。しかし、観光計画の最先端の話を聞くことができた上、短い時間だったが、長野市善光寺周辺の街並みを歩いたり、小布施町に立ち寄ることもでき、非常に有意義な２日間となった。

ＲＡＲＣの今後の活動予定に、観光地におけるリユース・有効活用の課題を如何に乗り越えたかという全国各地の事例を参照できる仕組みをつくり、試論的なモデルをつくっていくということがあげられており、これからの活動が大変楽しみである。　　（はら　けいすけ）

所　員　近　況

■伊藤若冲と売茶翁

昨年の６月ごろ、たまたまＴＶ東京の「美の巨人」にスイッチを入れ変えたときに、はじめて伊藤若冲を知った。若冲は江戸中期の作家で、もともとは京都の野菜問屋の跡取りであったが、40歳過ぎに家督を次男に譲り、本人は好きな絵を描いて暮らしていた人である。TVでは今で言う「ニート」の走りであったと解説していたが、どちらかというと「道楽」を極めた人であると思う。

若冲のなかでも最も独創的な絵である「鳥獣花木図屏風」は、虎、獏、麒麟などの動物の絵を約１㎝四方の桝目に切って描き、モザイク状になっており、タイル絵みたいに見えるのである。現在でも全く古さを感じないもので、ＴＶ画面でも充分その迫力が伝わってくる絵であった。是非、機会があれば実物を見たいものだと思っていたら、今年の１月に九州国立博物館で「伊藤若冲展」が催されるとのことなので、早速前売り券を購入した。非常に楽しみである。

伊藤若冲の絵を最も収集しているのがアメリカの「ジョープライス」という方であり、プライス氏が20歳代のときに日本の絵や文化の面白さ、すばらしさを教えたのが、建築家のフランク・ロイド・ライトであったということも驚かされる。

これ以来、伊藤若冲のことが気になっていたのだが、11月末に所員から「イムズ（天神にある商業ビル）で売茶翁の催しがあっているので、一緒に見に行かないですか」と誘われた。売茶翁とは、備前藩蓮池出身（現在の佐賀市郊外）で煎茶道の精神、方向を示した事で、この道の祖と言われている人である。会場に行って売茶翁の肖像を見ると、右端に作者「伊藤若冲」と書いてある。このときはじめて売茶翁と伊藤若冲とのつながりを知った。このときにはあとの予定があったため、お茶もゆっくり飲めず、説明も落ち着いて聞けずじまいであったので、非常に心残りである。今後、機会があれば売茶翁と伊藤若冲との関係をもう少し聞かせていただこうと思った次第である。

■宮崎の美味しい地鶏刺身

宮崎県の仕事の関係で、昨年10月連休のイベントにあわせてアンケート調査をする必要があり、市内に宿泊することとなった。その時に県の担当の方から地鶏専門店「軍鶏（ぐんけい）」を紹介していただいた。

７時ごろお店に行くと既に満杯状態で、「予約が入っているが、約１時間だけならＯＫ」ということで、１時間限定で「地鶏刺身」と「その他つまみ」「芋焼酎」を注文した。「その他つまみ」と記したのは、地鶏刺身以外何も覚えていないからなので、ご容赦願いたい。地鶏刺身を口にほおばり、噛むと何とも知れない甘みが感じられた。本当に美味しかった。これ以来、宮崎市で泊まる機会がなく、このお店には行けないのあるが、今後、行ったときは是非、「どこの産の地鶏なのか、鶏はつぶして、どのくらいが一番美味しいのかなど」いろいろ聞いてこよう思っている。

（山田　龍雄）

■インターネットの活用

昨年から始めた仕事の中で、久しぶりにいろいろな場所へのヒヤリング機会がありました。地元の人であったり、企業であったり、自治体であったり。この商売に関わって20年以上経ちますが、やはり人に話しを聞くというのが基本だと改めて思っています。

インターネットには、いろいろな情報が出ていますが、本当かどうかはもちろん分かりません。発信元が信用できるかどうかだけです。しかし、現場の人の話しは、目の前で聞く時、聞く側の人間の能力次第で、深くも浅くもなります。本当の話しを聞けるかどうかは、取材側の能力次第とい

うことです。そういう意味では、インターネットの情報も探す側、見る側の能力次第といえます。

しかし、インターネット活用によって、これまで図書館や本屋で文献を探す前にネットで関係記事や資料をまず探してからという点では、時間の節約、作業効率は確かに上がっています。逆に、情報を発信する手段としてネットをどう活用するかということが、最近の業務の中では必ずというほど問われます。

去年は、中国と直接と関わっていた分がかなり減少しましたが、実際の業務の中では、中国や韓国と日本・九州との関わりを前提としたものが結構ありました。一つは観光の問題であり、農水産物、エネルギーの問題などです。

10年ぐらい前には、ほとんどそういう関係は無かったとように思います。今や、地域の仕事をする際には、人の動き、モノの動き、お金の動きなど、計画を考える上で、いろいろな面において、これらの国々との関係が無いという業務の方が少なくなったように思います。

これから、インターネットの活用は業務の中で大きな比重を占めていくことは間違いなく、地域がどういうまちづくりを目指すのか、世界やアジアの動きを視野に入れながら考えないといけない世の中になったようです。

しかし、多様な言語で発信されている情報を翻訳するソフトがまだ完全とは言えません。もっとストレス無く言葉の壁をスルーできるソフトの登場に期待したいと思います。　　（山辺眞一）

■一日中　朝八時半から　大相撲

一度やってみたかった。「九州場所　八時半から　相撲づけ」これなら一応季語も入って俳句というところですが、見出しは駄洒落川柳ですな。九州場所という語は季語にはならないのかな。

ついにやった。

九州場所の空席があまりに多いので、何とか〈貧者の一灯〉でもと思って、みんなに呼びかけてみたが、賛同者がなかった。ところが後援会に入っている方のご厚意で、10月24日見に行くことになった。

ならば、と思って出かけたのが朝８時半の開場の時。７～８人しか並んでいなかった。少なくとも物好きはいるものだ。入って予定を聞くと序の口の取り組みは10:40からということでがっくり。

特別展示写真。巨大クエが写っている。九州場所は昔からクエ(九州ではアラ)がお相撲さんの好物だったのだ

10時40分、序の口取り組み開始

横綱の土俵入りの頃の場内

この場所は九州本場所50回目ということで、特別展示をやっていた。

やっと序の口の取り組みが始まったが、場内は閑散。取り組む力士は真剣なのだが、場内の緊張感はない。だが、髷の髪が伸びていない若手は張り切っている。

序二段の少し取り組みが進んだところで、呼び出しが一組とばして呼び出してしまった。休場で

不戦勝があるのかなと見ていると、力士が立ったり座りかけたりして、途惑った動きをしている。やっぱり、一組とばしてしまったようだ。こんな時、順番を変えてやるのかなと思ってみていたが、あっさり呼び出しをし直した。なまじ我々は、土俵のしつらえや行事の装束などを見て、神事の趣を感じているが、それほどのこともなく、序列の方が大切らしい。（取り組み順は番付の上下で決まっている）

客が少なくてとにかく寒いので、三段目の頃、弁当と熱燗を買ってきて食べながら見ていた。その所為で、三段目と幕下の辺りで、二～三度居眠りをした。誠にゆったりとした時間だ。大相撲は入場料が高いと思われているようだが、そうではない。枡席で１人11000円ぐらい、椅子席Ａで8000円ぐらい。弁当、熱燗、缶ビールなどを入れても15000円、10000円ぐらいだ。

若い人が１万円以上もする歌手のショウを見に行っているが、１～２人しか出てこない。相撲は、力士だけで十両・幕内で80人ぐらい。序の口から幕下までで200人ぐらい出場する。それ以外に行司、呼び出し、親方衆、その周辺に相撲茶屋もあるだろう。人数が多けりゃいいとはいわないが、大相撲は高くない論に納得いただけたでしょうか。

ついでに言うと、歌舞伎も安い。

それはともかく、この大相撲の組織を経営して行くのは大変ではないか。

もう一つ、大相撲で感じたこと。屋根の下で布団があって、腹一杯食べられるという場にいて、緊張感を持って相撲の稽古を続ける、ということも大変だと思った。ハングリー精神などというが、バックグラウンドがハングリーでもなく、相撲にいれば食べられるという条件で、上を目指すためのガッツを持ち続ける力士はえらい。東欧出身の舛東欧と隆の山は上位に上がるように思った。

馬鹿馬鹿しいことばかり書いているとお思いでしょうが、こんな時間を、一年に一回ぐらいは持ってはいかがですか。九州の方はもちろん、関東、関西の方でも、クエ鍋（この魚はタイやマグロみたいな大味なものではない。刺身もすごい）、サバの刺身ぐらいは用意します。

■2007年からネット人間を目指します

私のホームページURLは、http://www.jinet-t.comですが、「じねん通信」で検索して下さい。また、日曜日に「いとしまラジオ」で午後２時から無駄話をしています。これもネットで開いてみて下さい。ブログで「落ちこぼれでも人もうけができる」という自伝を始めるつもり。なお、糸乗への連絡は、itonori@mue.biglobe.ne.jpへ

（糸乗　貞喜）

■“まち選び”住民誘致"の時代はやってくる？

2006年は、自分の周りの環境が大きく変わる年だった。４月には両親が退職して近所に移り住んできて、11月には自分も新しい家庭を持つことになった。私自身は糸島を気に入っていて、将来は田園居住をしたくて前原市に移り住んだのだけど、嫁さんや母親からは、やれ総合病院がないだとか、街が暗い、ゴミ袋が高い、バスや電車の本数が少ないなどと、小言を言われ放題である。

不動産めぐりをする際に相談したじゃないかと思うのだが、よくよく考えてみると、小言の内容は、「まち」に関することばかりである。不動産屋だけでは手に入らない「まちの情報」というものも、奥様方にとっては結構重要のようだ。マイカーの選択権は、奥様が握っているというマーケティングの話を聞いたことがあるが、もしかすると高価なものほどそうなのかもしれない。将来、本当に田園居住をさせてもらえるのかとちょっと心配である。

田園地帯の糸島地域でも、役場の人の４～５割が自市町村に住んでいないという話を聞いて驚いたことがあるが、都市部の人はなおさら地域とのつながりが希薄だと思う。福岡都市圏が仕事場とすると、通勤時間を１時間我慢できる人であれば、西は唐津から東は北九州、南は久留米までが十分居住圏域になるわけだ。リタイヤした人たちは、働き場に束縛されることもないので、もっと選択の幅が広い上、時間のゆとりもある。

そうなると、何が"まち選び"のポイントになるだろう？

もちろん、お金や立地条件や土地勘があるかなどの要素は大事だが、車や携帯電話のようにマーケットが成熟してくると、機能からデザインや快適さなどに関心が広がるように、住むまちの選び方も変わってくるのではないかと思ったりする。私なんかは、生まれたときから○○ヶ丘ニュータウンなどで暮らしてきたので、街のデザインがまったく進歩していない郊外団地にはまったく魅力

を感じない。また、財政破綻した夕張市のように「市民税や固定資産税などが増税され、軽自動車税は一・五倍にもなりました。ゴミ処理も一リットルあたり二円かかるようになったし、下水道使用料なんて一・七倍。さらに保育料が年額で十二万円以上も上がった…」というような話を聞いていると、行政の都市経営・運営の状況も無視できないなと思う。ただ団地を造るだけでなく、居住者が孤立しないためのサポートやいろんな世代や家族形態の人が住める街づくりを考えるなど、もっと"住民誘致"に熱心なところがあれば、口コミでも人が集まってくるのではないだろうかと考えたりする。今年は田園居住だけでなく、もっと一般の人が住みたくなる街のニーズというのも掘り起こしていきたいと思う。（本田　正明）

■地元ネタで元気と笑いをくれる劇団ギンギラ太陽ｓの講演を見ました

昨年は、２ヶ月に１回を目安に、コンサートや演劇を見ようと思いたち、生で見るプロフェッショナルな技やライブ感を楽しんだ１年でもありました。11月は、友人に誘われて地元福岡の劇団「ギンギラ太陽’ｓ」の公演を見ました。この劇団は、頭にビルや乗り物の形をしたいわゆる「かぶりモノ」を被り、そのビルや乗り物の目線から福岡のまちで起こった出来事と現在の事情を「そうそうそうなのよ」とおもしろおかしく、一方で「へぇそんなドラマがこの福岡であったのかぁ」と大事なことも伝えられて涙をそそる場面もある作品で人気の劇団です。

私は以前にも、スカイマークエアラインズが東京～福岡間に参入した際の模様を中心に、北部九州の空港事情や日本が制作したＹＳ-11の話が出てくる作品を見ました。入社１年目、鹿児島への仕事によく利用したＹＳ-11が、まさか日本製だったとは。この作品で私はそのことを知りました。

今回は、劇団結成10周年記念の総集編ということでこれまでの作品と最新情報を織り交ぜたものでした。終戦直前まで福岡で急ピッチで開発が進められていた飛行機“震電”の話や昨年９月末に国内での飛行が終了したＹＳ-11の終了日前にかぶりモノをつけて搭乗した時のルポ、天神にあるデパートの岩田屋や大丸などが女性に扮してその戦略と変遷を物語る、題して「女ビルの一生」という盛りだくさんの内容でした。

以前、テレビで作品を作り上げるまでのドキュメントが放送されていましたが、作品を作るための取材量は半端ではないようです。自分の生まれる前にあった知らないことも、自分の目で見てきたことも、かぶりモノを被ったキャラクターを通して知ったり新たな発見があったりします。思い切り泣き？笑った後、劇の最後は「私達ギンギラ太陽’ｓはこれからも福岡の人にしかわからない劇をやっていきます！」という言葉で締めくくられます。昨年は、東京でも地元福岡での内容を一切変えず３日間の公演を行い、チケットは完売したそうです。それからファンになった方のＨＰでは「福岡のことをもっと勉強して楽しみたい」と言わしめているようです。福岡の宝をこれからも応援していきたいと思います。　（愛甲美帆）

■市民も観光客も楽しむ佐賀城下ひなまつり

平成19年２月17日～３月31日まで、佐賀市の初春の風物詩となった“佐賀城下ひなまつり”が開催されます。

期間中は、佐賀市内は鍋島家に代々受け継がれたおひなさまや、佐賀の伝統工芸である「手織り佐賀錦」を使ったおひなさま、14代今泉今右衛門が今回のひなまつりのために製作した姫皿・殿皿、地元市民が公開するおひなさまなど、色とりどり、大小様々なおひなさまで彩られます。

また、佐賀城下ひなまつりは、おひなさまを見て歩く他にも、街なかの賑わいや、観光ボランティアの方々をはじめとした佐賀市民とのふれあいも、佐賀城下ひなまつりの楽しみ方の一つとなっています。期間中は佐賀市のいたるところで骨董市などのイベントなどが開催されますが、今年は佐賀市中心市街地にある“佐賀座”にて、佐賀出身で、煎茶道の祖である高遊外売茶翁にちなんだ、お茶とお菓子と陶器のセットや、佐賀のおいしい海苔や米などの食材を味わえる“おにぎりカフェ”など、佐賀市の食・文化に触れることができる場が設けられます。佐賀座では、佐賀県内の名陶68名の作品の展示・販売も行われていますので、ご休憩の際に立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

佐賀城下ひなまつり

期間：平成19年２月17日（土）～３月31日（土）
お問い合わせ先：佐賀市観光・文化課
TEL：0952－24－3151（代表）
URL：http://www.city.saga.lg.jp/kankou_hina/

売茶翁の心　おもてなし茶屋

期間：ひなまつり期間中（2/17～3/31）の土日、祝日及び３月１日・２日計15日間
時間：11:00～16:00
場所：呉服元町ビル（佐賀座）
料金：煎茶セット　400円

売茶翁の心　おもてなし茶屋

場所：呉服元町ビル（佐賀座）
時間：11:00～16:00

■もうすぐ子供が生まれます

もうすぐ一人目の子供が生まれる。先月まで日々大きくなるお腹をさわって、あ、今蹴ったね、なんて、のんきに笑っていた私ですが、妻が出産のために里帰りし、いよいよあと一週間で生まれるともなるとさすがに、名前を絞り込んだり、保健の手続きをしたりと、あわただしくなってきました。正直これから始まる初めての子育てを思うと不安な面もありますが、これからは仕事と家庭のバランスをうまくとるよう意識してやっていきたいです。その前に、今は母子共に無事に出産を終えることを願うばかりです。（雪丸　久徳）

■宝が当たる神社へお参りに行きました

昨年の12月に、佐賀県唐津市高島の宝くじが当たる事で有名な宝当（ほうとう）神社に行きました。もちろん宝くじを持って。高島へは、唐津城の前の大きな駐車場の側の桟橋から船がでています。

最近テレビなどで紹介されていたものの、その日はこの冬一番の寒い日だったので、人は少ないかなと思っていました。が、船の室内には50人程座れるのですが、そこはいっぱいで、残りの人は外の席に座らないといけない程でした。10分程で高島に着くと、「参道←」の看板があったのでその通りに進むと、「開運宝当袋」や「開運グッズ」が売ってある「宝当海の駅」というお店があります。テレビで見たので、そういう物があるのは知っていましたが、わざわざ買わなくても‥‥と正直思っていました。しかし、そのお店は参道の一部のような感じで、自然と流れるように店内に入ってしまい自然と「開運宝当袋」を購入しました。お店の方が、その場で宝くじを袋に入れてくれ、神社での参拝の仕方も教えてくれました。

宝当神社はとても小さな神社で、人がたくさんいるのですが交代でサッとお参りするので、混雑してるという感じはなかったです。来ている人は、若い人から年配の人、小さい子供連れの家族まで幅広い層の人達でした。壁には沢山の「○○○万円当たりました」などの張り紙があり、横に置いてあるノートには、「ジャンボが当たりますように」などの書き込みが沢山ありました。もちろん私も書いてきました。

今回行ってみて、「開運宝当袋」を販売しているお店は「宝当海の駅」だけではなく、隣にもあり、また参道の途中で売っている人もいて、失礼ながらこんな小さな神社のおかげで、仕事が発生している事や、どこかの旅行会社のツアー客が来ていたように、沢山人が訪れていて、観光が成り立っている事に驚きました。

宝くじが当たったかどうかはお楽しみに。

（佐伯　明日香）

編集後記

■昨年は10～11月にとても温かく、本当に秋らしさを感じた日が短かった年であったと感じます。将来、日本も温暖化の影響で、“季節の移ろい”といった感覚もなくなっていくのかも知れません。

さて、昨年「よかネット」９月号、11月号は、かなり送付が遅れてしまい、楽しみしていた方には甚だご迷惑をおかけしたと思い、恐縮しております。

１月号は「年始のあいさつ」も兼ねていることから、遅れてはならじと、所員に“ハッパ”をかけ、なんとか予定どおり発行できました。「その気で取りかかればできる」ということを改めて認識した次第です。（や）

よかネット　No. 85　2007. 1

（編集・発行）
㈱よかネット
〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町３番８号
福岡パールビル８階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6942-5732
東京事務所　TEL 042-501-2531
名古屋事務所　TEL 052-202-1411
㈱地域計画・名古屋